ポケットモンスター　～とある人外達の奮闘記～

林田　吾唯子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　～とある人外達の奮闘記～

【Ｎコード】
Ｎ１９４１Ｖ

【作者名】
林田　吾唯子

【あらすじ】
ここはポケモンと人間が共存する世界
一見平和な社会にも存在する差別と偏見。
その対象はポケモンであり人間である異形の者達。
総称は、無い。
そんな異形に生まれついてしまった少年少女達の小さな冒険記。

プロローグ

ここは私達の世界と表裏一体な、いわば明るい日常の暗部。
私達は日常的にポケットモンスターという生き物と共存して生きているがその中にもポケモンであり人間でもある生き物がいる。公にされたことがないため公式な総称はなく、様々な呼び方が存在する。彼等の外見は私達人間とさして変わりはない。私達と同じものを食べ、同じように寝て起きて、同じようにポケモンを使役する。では何故総称が存在せず、公にすらなっておらず、暗部と称されているのだろうか。それは彼等と私達の間にある一線。彼等はポケモンと同じく進化し、ポケモンと同じくそれぞれのタイプに見合った力を使うことが出来るのである。そんな生物は無論、危険とされ、遠ざけられるのが世の常。だが彼等に非はあるのだろうか？
此度語るのはそんな公にならない生き物の物語。

プロローグ（後書き）

小学五年生の頃に書いていたポケモン漫画をノベライズしました。
流れ的にはシンオウ地方から南へと進んでいくつもりです。
因みに主人公の親事情は単にいないということの言い訳的な？

来訪者（前書き）

主人公紹介的なコレ

日常の転機的なソレ

ネーミングセンスがアレ

来訪者

突然だが、私に親はいない。
私達、異端の人生は母体の胎内で突然変異的に始まるからだ。
おなかを痛めて帝王切開までしてこの世に送り出した子どもが私とあっては気の毒な感情がわかないわけでもない。
生んだ瞬間に医者が告げた言葉により私の母は疲労とショックでストレス性ショック死したのだ。
父はそんな私の出生を聞くやいなや父親になることを放棄して母の後を追った。
私の出生に意味は在ったのだろうかと思うと哀感と罪悪感で潰れそうになる。
だから私の家族は父のモンスターボールにいたこのポッチャマだけだった。幸い私のポケモン部分はポッチャマなので対話だって成立する。それがせめてもの救いだった。
　そんな私も、今日で十歳の誕生日を迎える。かといって私の日常にたいした影響は存在しないのだが。
『ヒョウ、今日でヒョウは人間の十歳になるんだよね？二分の一成人だよね？』
「ちゃま、それは違うよ。私は人じゃない。だから成人もないの」
『そうなんだ…あ！ねぇヒョウ、今日はヘンにおうちのまわりのナエトル達がざわざわ。炎タイプのポケモンとか、滅多に来ないモノが来るときみたい。ボクもザワザワそわそわ！』
彼は私の気持ちを切り替えようとしてくれているのか。気を遣わせてしまってなんだか申し訳ない気分だ。だが彼の言っているナエトルの異変も気になる。私達が住んでいるのは湖畔のツリーハウス。それこそ炎タイプやニンゲンなどが来ることは滅多にない。あるとすれば両者とも迷っている場合のみだ。それにナエトル達は他のポケモン達が感知しづらい湖の異変、環境の変化を敏感に察知する。

信用するに越したことはないだろう。なんたって草タイプ、植物なのだから。

来訪者（後書き）

主人公の容姿：水色の内巻きの髪（肩まで）。ポッチャマの首元的な襟の付いた膝丈ワンピース。裾、袖口は群青のふちどり。黄色の靴を脱がない。目の色→水色。肌がもの凄く白い。

まさかのバトル展開ｗｗｗ（前書き）

何故こうなってしまったかなんて私には分からない。
小学五年生の頃の私に聞かないと分からない。
だって現在中学生の私はその頃のカオスな漫画を読み返してノベライズしてるだけだもの…

まさかのバトル展開ｗｗｗ

『ヒョウ！見て！』
ポッチャマのちゃまが言うが早いか私が様子を聞きに行こうとしたナエトル達が一斉に森へ走り出す。
「ちゃま、おいで」
私はちゃまと共に茂みに身を潜め、戦闘態勢に入った。

「おい葉矢（ヨウジ）、こっちであってんのか？オレここで戦うのは嫌だぞ」
「俺がいるよぉ。それに反応はちゃんとここ付近だよ。ルイちゃんの発明品を疑った事がない剛毅（ゴウキ）にしてはえらく弱気だね」
「だってアレだろ？ポッチャマだろ？オレ炎だぜ？勝算なんて」
「俺の事馬鹿にしてるよね？俺の葉っぱカッターの命中率知ってるよね？」
私達の目に入ったのは二人の少年。歳は私と変わらないだろう。だが私が一番驚いたのは…”彼等が私と同じ”であること。
『ヒョウ、この人達』
「分かってる。でも用心して、無害とは限らないから」
『うん…』
＜ガサッ＞
いけない！後ろにまだ残っていたミノムッチが私を見て動いてしまった！
「っ！おい葉矢！」
「うん、確かこっちの方で物音と同胞（はらから）の反応が」
二人が近づいてくる。もはや私に選択肢など残されていなかった。
「ちゃま、つつく！」
「うわぁっ！」
私のちゃまが葉矢と呼ばれた少年を私が茂みから私に投げ上げられた勢いを加算させてつつく。草タイプと思われる彼には有効なはず

だ。
「おまえっいきなり何をッ？！」
剛毅という少年が言い終える前に私は跳び上がり、空中にて彼にバブルこうせんを放つ。目くらましには十分だったであろうか。
「くっ・・・」
予想以上のダメージを与えることに成功したらしい。なら彼はこれで当分動けまい。
さて、葉矢の方はというと
「痛かったじゃないか。彼は強いポッチャマだね」
そう言って彼は戦闘不能になったちゃまをそっと草むらに寝かせていた。
　彼は、剛毅という名のヒコザル少年よりは強いようだ。
「そうだね、自己紹介でもさせてもらうとするよ」
いや、しなくてももう名前は割れてるぞ？

まさかのバトル展開ｗｗｗ（後書き）

容姿説明

ナエトル的な少年：土色混じりの若葉色の髪。温和しそうな印象。目の色→黄色。袖口とかが黒い土色のジャケット＋深緑の長ズボン。

ヒコザル的な少年：赤茶けた色の髪。荒っぽい感じ。目の色→朱。茶色のリストバンド＋裸足＋襟と袖が赤く、胴の部分が黄色いＴシャツ＋茶色の長ズボン。

レッツ　ヘッド　アウツ　フロム　ディス　フォレスツ（前書き）

ちなみに前々話で名前だけ登場したルイちゃんはレアコイルの女の子だったと思います。
サブ翻訳『この森から抜けだそう』

レッツ　ヘッド　アウツ　フロム　ディス　フォレスツ

「そうだね、とりあえず自己紹介でもさせてもらうとするよ」
いや、しなくてももう名前は割れてるぞ。
「俺は戊葉矢（つちのえウジ）、分かってるとは思うけれどナエトルの異端者。そこでうめいてるヒコザル君が？埜剛毅（ほむらのゴウキ）、君は？」
相手方も名乗っているので私もとりあえず、礼節というものをわきまえて。
「私は鋼屋氷華（はがねやヒョウカ）。見ての通り、私のポケモン部分はポッチャマ」
「鋼屋さん、だね？俺は面倒ごとが嫌いだから手っ取り早く済ませるよ。ん？あぁ、構えなくても大丈夫。信じてはもらえないかもしれないけれど俺たちは君の味方だよ」
「保証は？」
「必要？」
でもどのみち戦ったとして私に勝ち目は無いような気がする。何にせよ2対1では不利だ。
「用件は」
「殊勝だね。うん、かいつまんでいわせてもらうよ。俺たちは君を迎えに来たんだ」
・・・は？

ビリーヴィン　アンド　テイキン　ア　ステップ　アヘッド（前書き）

唐突で意味の分からない展開については小学生時代の私に文句をどうぞ！

サブの翻訳→『信じて一歩、前に進むこと』

ビリーヴィン　アンド　テイキン　ア　ステップ　アヘッド

　そのまま私はいわれるがまま、彼等について行った。
戊(つちのえ)の言うようにもう二度と戻ってはこれないかもしれないので私の家族として生きてきたポケモン達も連れて行くことにした。
たったの五、六年ぽっちしか住んでいない場所ではあったが、それでも住処を離れるのは少し、淋しいような悲しいような何とも言えない思いだった。

「うぉっ、お前のギャラドス強そうじゃん！」

「そうだね。それに標準よりも大きい」

彼等はボールごしに私の兄妹の一人であるギャラドスのラドスに興味を持ったようだ。

「ラドスは小柄なコイキングだったからちゃまも一緒によく遊んでた。気がついたら巨大化してたんだ」
　誰かと人の言葉で話すのは久しぶりで、饒舌には話せなかったけれど昔の感覚を思い返す感じが少し心地よい。
道中の半分はたわいのない話でもしていようか。

「そのポッチャマはモンスターボールに入れないの？」

「彼が意地になっている。どうしても入るつもりはないんだって」

『ヒョウだって女の子！男二人と歩くのは危ないの！ボクが男としてヒョウを守るのっ！』

・・・いや、戦闘能力的に無理だろう。
戦闘能力といえば、そうだ。

「戊…君？」

「何？」

「あなたわたしのちゃまに勝ったでしょ？どうやって？今じゃちゃまが一番強い兄妹なのに」

私と私のポケモン達は兄妹なんだ。
小さい頃からずっと一緒に苦楽を共にしてきたんだ。
それを否定しようものなら何が何でも彼等から逃げるつもりで、あえてちゃまを兄妹だと彼等の前で言ってみた。

「うん、正直言ってこのポッチャマ凄く強かったよ。今まで見たどんなのより」

否定、されていない…？
それとも気にもとめなかったのかかは定かではないが、そんなの否定しなければどうだって良い。
私は、彼等を信じることにした。
ふと視線を下げるとその言葉を聞いて胸を張るちゃまがいて、胸に沈殿していた重々しい何かが吹き飛んでしまった。
さっきまでプライドをくじかれてその挽回をしようと必死だったくせに、彼の立ち直りの早さは一級品みたいだ。

「だからさ、つつくとか、れいとうビームとかを必死に避けながらこの種を彼に投げ続けたんだ」

「何、それ」

「やどりぎのタネの改造版。養分を吸収する能力を削る代わりに根っこを強くはって相手の動きを鈍らせるんだよ」

「なるほど、確かにソレは得策。ちゃまの強さはあのすばしっこさだから」

「そんでがんじがらめになってきたところを葉っぱカッターで一発。俺の葉っぱカッターの命中率は自慢できるほどだから急所に当ててK（ノック）・O（アウト）かな」

「のっくあうとって倒すって意味？」

「ああ、そうか。君はずっと世俗から離れて生きてきたんだよね」

「だからちょいちょい常識に疎いのか」

「うん、だからいろいろと教えてほしい。おねがい」

ここからｓｉｄｅ剛毅です☆

そう言ってさっきまでにこりともしなかったポッチャマの異端者、鋼屋氷華がこちらに笑顔を向けた瞬間、俺は一瞬硬直してしまった。それは精密機械や人形のように精巧で、制止した湖面のように澄んでいて、否、俺の知るどんな単語でも比喩しきれないほどに、言葉で表現してしまうのが無粋な行為に思えるほどに

ーーー綺麗だった。

俺が女の子の笑顔にこうも感銘を受けたのは初めてで、こんなモノがまだこの世にあったんだとつい、惚けてしまった。

「？埜（ほむらの）？どうした？」

「なんでもねぇよ。つーかいちいち人の顔をじろじろ見てんじゃねぇよ！」

「ごめん…」

あぁっ！だからもうそんなに申し訳なさそうな顔をするな！もの凄く悪い気がするだろうが！

「っ・・・」

「どうしたの剛毅。いつになくわたわたしてるよ？」

ビリーヴィン　アンド　テイキン　ア　ステップ　アヘッド（後書き）

途中から?埜君の視点でしたね。
彼、最終進化するまでザコ設定です。ご了承下さい
因みに戊君は初っ端からチートです。
最早チートです。

ア　シードリング　オフ　ア　リトル　ラヴ　ストーリィ（前書き）

剛毅君の初恋&嫉妬心
サブ翻訳→『小さな恋物語の芽』
Ｓｉｄｅ剛毅

「どうしたの剛毅。いつになくわたわたしてるよ？」

「っせぇ！ってかわたわたって何だ！わけ分かんねぇ擬音使ってんじゃねぇ！」

葉矢は馬鹿みたいに長い間一緒にいるから俺のちょっとした事にまで感づきやがるから厄介だ。
しかもそれが大正解だから困りもの。

「？埜（ほむらの）、わたし」

「ったりぃから剛毅（ゴウキ）って呼べ。俺もお前のことはひょ・・・氷華（ヒョウカ）って呼ぶから・・・」

「・・・わかった。剛毅、わたしはお前達と一緒にいても余り役に立たないと思う。水が倒せるのは草でも倒せる。意味ない」

「そんなこと」

「んなこたねぇよ！たまに草じゃ軽すぎて岩にあまりダメージを与えられないことだってあるんだ。それにこの中じゃ泳げんのお前だけだぜ？」

「そう？わたし一緒にいてもいい？意味あり？うれしい！」

本当に、コイツは世俗から切り離されていなければ幸せな可愛い女の子として生きていけたんだろうなと思う。

でも同時に、異端であれたからこそ俺たちと接点がもてて、無垢で在り続けられたんだろうと考えてみるとここはやはり異端であることに感謝をしたい。

「あ、そうそう。剛毅が呼び捨てなら俺も葉矢（ヨウジ）でいいよ。むしろそっちの方がいいや」

「分かった。葉矢！」

・・・少し、いらっとした。
何に苛ついたのかは定かではない。
嫌、多分大体薄々おおよその検討はついている。
でもそれに対して違うと言い切って別の理由を探す、俺。

ーーーなんか、凄く情けない。

ア　シードリング　オフ　ア　リトル　ラヴ　ストーリィ（後書き）

バトル関係無しに剛毅君のわたわたを書くのが楽しい。
剛毅君のちっさな嫉妬心が最高に可愛い。
近々氷華ちゃんのイラストでも張ろうかと目論んでいます↑↑↑↑

ノウイング　イーチ　アザー　アンド　テイキング　ア　ステップ　フォーワード

タイトル翻訳『互いを知ることと、共に前へ進むこと』
今回、一人称視点解除☆

ノウイング　イーチ　アザー　アンド　テイキング　ア　ステップ　フォーワード

三人は日が暮れてきたのを確認し、手頃な高さの木に登って寝ることにした。

「あなたたち、そもそもどうやってわたしの居場所わかった？」

「このレーダーを使ったんだ」

葉矢はバッグから彼の手の平より少し大きいくらいの機械を取り出した。

「なに？それ」

「これは俺たちみたいなのをみつける機械だよ。今映ってる三つの赤い丸が俺たち」

映し出されていたのは黒地に蛍光色の緑で線を引いた方眼紙の様な画面の真ん中に三つの丸。

氷華はそれをとても簡易的でわかりやすいと思った。

「これを作ったのが俺たちの本部にいるルイちゃん。ルイちゃんのポケモン部分はレアコイルで、本名は西薗磁琉生子（さいおんじるいこ）。本部で役に立つ機械を沢山作ってくれてるんだよ」

「・・・本部？組織なの？」

「あぁそうさ。ま、頭が誰かは知らねぇがよ」

太い枝に座り、幹を背もたれのようにして体を預けていた剛毅がぶっきらぼうに言い放つ。

「俺たちの目的は俺たちみたいなのに対する差別・偏見をなくすことと」

「うん」

「俺たちみたいなのの力を欲しがって悪用しようとしている輩はたくさんいるからね、そういう奴らから同胞を保護すること、目をつけられる前に仲間に入れること、必要とあらばそういう奴らを倒すことなんだ」

「・・・ふーん」

「お前今の話、理解してっか？」

「それは分かった。私が思ったのは、私達みたいなのは居場所がなかったから、居場所がもらえると思ったらどんなヤツにだってついて行ってしまうってこと。そういう気持ち、知らずにそんな同胞（わたしたち）の人生を駄目にしようとする奴らが許せない」

「そうだよ、氷華。溺れている者、自分が溺れていると思っている者は藁でも、それこそ毒草でもつかみ取ってしまう。だから俺たちが命綱を投げるんだ」

「ケッ。つっても俺ら、下っ端中の下っ端班だけどな」

「なんでそういうこと言うかなー…」

「じゃあわたし、あなたたちに付いてきて正解だった？」

「ん、まぁな」

「そういう輩だけじゃなく、氷華ならほかの悪い人間にも攫（さら）われそうだけどね」

「ほかの悪い人間？」

「うん。氷華、綺麗な顔してるから売られたり愛玩されたりしそうだよ。俺たちはぱっと見人間とさしてかわらないし」

「葉矢っ！お前！」

「剛毅？間違ったこと言ったかな？俺」

「っ…あーもういい！寝るぞコラ！」

ノウイング　イーチ　アザー　アンド　テイキング　ア　ステップ　フォーワー

今回も剛毅くんのわたわたが見れた（？）ような感じですねー
ルイちゃんのレーダーはまぁ、漁船についてるアレみたいな？

インスィデント　ザッツ　アイ　ディドゥンツ　メンツ（前書き）

サブ翻訳『私が意図せずに起きていた出来事』
今回も引き続き一人称視点解除です

インスィデント　ザッツ　アイ　ディドゥンツ　メンツ

少し時間がたつと、氷華は自分がいた少し高めの枝から事もあろうか剛毅のいる太い枝に降りてきた。

「んなっ！」

そしてそのまま彼の下腹部あたりに頭を載せた。

「おい氷華てめぇ・・・ん？」

「あったかい…」

人肌より少し暖かいヒコザルの異端者、剛毅の体温に惹かれて降りてきたらしい。

彼はそのまま何も言えず、黙って彼女の頬に手を添えた。

「月明かりで白く照らされて…本当整った顔してるな、こいつ」

彼の足の間にある氷華の体は湖畔での食生活を物語るかのようにほっそりとしていて、彼が少しでも足に力を入れたら潰れてしまいそうだった。

「君は人の顔をじろじろ見るどころか手を添えているじゃないか、剛毅」

「うわっ、葉矢！」

「しーっ。起きちゃうよ」

「・・・」

「剛毅って眉のラインがくっきりしててすこしきつめの女の子が好きなの？」

「っせぇな・・・」

「やっぱ水タイプって体温低いの？」

「俺から見たらたいていの水タイプ、草タイプは低体温だっつの」

「そうだったね」

「お前はナエトルだしな」

「そうだね。ねぇねぇ、俺も暖めてよー」

「よるな気色悪い！」

「氷華はいいのに？」

「うるせぇ！」

「あはっ、冗談だよ。俺はヘンにあっついと体に良くないし」

葉矢は剛毅を下の枝から見上げ、悪戯っぽく笑う。

剛毅は彼の発言に突っ込みを入れる際も氷華を落とさないようにそっと足で支えている。

その光景は誰が見ても微笑ましいと思うだろう。

「俺たちもそろそろ寝ようか」

「だな」

「じゃ、おやすみ」

「おう」

ーーーー二人の少年は一日の疲れを癒すよう、そっと目を閉じたーーーーーー

ア　シンプル　ブレイクファスト（前書き）

サブ翻訳『簡素な朝食』

今回も…以下略

ア　シンプル　ブレイクファスト

翌朝剛毅が目を覚ますと氷華と葉矢が下で朝食の準備をしていた。
といっても剛毅のヒコザルと氷華のポッチャマの協力を得て食べられる木の実の葉を煮込んでいるだけなのだが。

「葉矢！コイキング何匹必要？」

「あと二匹かな」

「わかった！」

氷華は木のてっぺんから見える距離にある川で彼女のものと思われるブイゼルと一緒にコイキングを捕まえている。
無論、両者とも素潜りで素手だ。
剛毅は特に意味もなく”今起きた感”を装い、木から飛び降りた。

「あの野生児嬢ちゃんは元気なこったねぇ。俺なんか人の生活に慣れすぎて腰と首が痛ぇわ全く」

「クスッ、俺が先に起きてぼうっとしていたらさ、あの子いきなりむくっと起き上がって自分の寝てた場所を確認すると真っ赤になって木から落ちちゃったんだ」

「マジで？」

「うん。それで川に走っていってポッチャマと泳いでたよ」

「アイツにも性差ってもんがあるんだなぁ」

「葉矢ー！採ってきた…よ」

「おっ、お疲れさん」

またしても剛毅の顔を見ると頬を染め、走り出そうとする氷華の背中に向かって葉矢はすっと右手をさしのべた。
すると彼の手に沿って袖口から何かの植物が生え始め、驚くべきスピードで氷華に追いつくと彼女の細いからだを絡め取り、一気に彼の目の前まで引き戻した。

「わっ！」

「走り回るのも良いけれど、とりあえず朝食にしようか。そのコイキングも焼くからね」

「はーい…」

ア　シンプル　ブレイクファスト（後書き）

分かるとおり、氷華ちゃんはリッシ湖の湖畔に住んでた子です。彼女の手持ちはポッチャマを始め、そこに住み着いてから手に入れた彼女の兄妹。

ブイゼルーいぜる
ポッチャマーちゃま
ギャラドスーらどす

It was what I always wanted to say.

葉矢と剛毅の手持ち紹介的な？
友人に、カタカナ英語読みにくいと言われたのでちゃんと書きました。
サブ翻訳『それは俺がいつも言いたかったこと』
今回は葉矢君視点です。

It was what I always wanted to say.

朝食を済ませた俺たちはコイキング達の骨を魚ポケモンの供養よろしく川に流した。
綺麗な水に少しずつ流されながら沈んでいく彼等の骨を感謝と慈しみの目でみつめる氷華は年齢にそぐわない綺麗さを持っている。

少し進んだところでなれ合いのためにもポケモン達をボールから出してみた。
木の実をつつく俺のナエトルと氷華のポッチャマはどこかお互い警戒しているようで可愛らしい腹の探り合いをする。
わざと相手の方に木の実を押しやったり食事をいったん止めて相手をじっと見ていたり。
剛毅のヒコザルなんて氷華のギャラドスと打ち解けて川を乗り回しているくらいなのに…

ーーー本当に、彼等は見ていて飽きない。

「おいデッパ、リキ助、エテ吉！そろそろ戻れ」

剛毅が彼のビッパ、ワンリキー、ヒコザルを呼び戻してボールに入れる。
にしても彼のネーミングセンスはどうにかならないものだろうか。
ビッパのデッパもそうだがエテ公だからエテ吉だなんて安易というか酷すぎる。
エイパムを見つけたらなんて名前にするかなんて聞きたくもない。

「いぜる、らどす！戻るよっ」

その点ではこの二人は共通しているだろう。
最後の三文字をとるだけって…
名前が三文字以下のポケモンや三文字にすると小字の所為で発音不可能なポケモンはなんて名前にするつもりだ。
ブニャットとなんて”ニャッ”なんて擬音じみた名前になりそうで怖い。

「ナーエ、ウソハー、コロリー。戻っておいで」

“なんだかんだ言っておきながらお前はどうなんだ”
だって？

人によって価値観は違うものだから健全なウチは何でも良いと思う。
只、モチーフが酷いものに関しては突っ込ませて欲しい。そこの所よろしく頼みます。

It was what I always wanted to say.

三人の手持ちは話が進むごとに進化したり、増えていったりします。

剛毅

エテ吉→ヒコザル

デッパ→ビッパ

リキ助→ワンリキー

葉矢

ナーエ→ナエトル

ウソハー→ウソハチ

コロリー→コロボーシ

Please notice that your physical is

サブ翻訳『自分の身体能力が信じがたいほどのものだと気づいてくれ！』

今回も引き続き葉矢君です

「さ、着いたよ」

「何処に？」

「だから、本部」

氷華が目を丸くするのも無理はない。
俺たちの本部は普通の人間に感知されることがないよう、地下通路のさらにしたまで掘り進んだところにあるからだ。
無論、地表からは入り口なんて普段使っている者すらレーダーを使って探知しないと見つけられないほど。

「まぁ見てなって。お前入り口見たらビビるぜ？」

目をごしごしとこすって必死に入り口を探す氷華の足下に葉っぱカッターの葉を突き刺し、上手く刺さる位置を探す。そここそが出入り口の蓋のフチなのだ。

「氷華、どいて。ここ開けるから」

「あっ、うん！えっ？ここ？！」
葉っぱカッターの葉を差し込むことによって地面と蓋の間に出来た隙間に俺の意志で動かせる蔓をのばして蓋に絡ませる。

「・・・ふぅ」

この蓋は何度持ち上げても重い。氷華の体は軽かったと改めて実感

する。

蓋を開けると長い梯子(はしご)がある。もちろん人間の体力、筋持久力じゃあ降りきることは難しい。
そう思って剛毅を見れば腹立たしいと感じる人もいるだろう。
彼の場合ベースが人間のヒコザルなので木や梯子の上り下りは普段歩いているのと何ら変わりない様子でできるのだ。
一方氷華の具合はというと・・・

「合図してねー。いくよーっ」

と梯子の端の縦棒を両手でつかみ、その力を緩めることで一気に何段も降りていく。
俺たちがかなり降りてから着いてくるという形になるので正直かなり怖い。
というか君達はエイパムか。

A new encounter（前書き）

サブ翻訳：新しい出会い

毎度毎度多重視点ですみません！！！

A new encounter

「さ、着いたぜ。もう気にせず落ちてこい！」
「はーい！」
最終的には梯子を蹴って氷華は飛び降りた。高さ十メートル弱から飛び降りるだなんて俺にそんな勇気はない。
「かえったか。剛毅、葉矢。そいつが今回保護するポッチャマなのか？」
「おぅ、なかなかのじゃじゃ馬さんで手こずったぜ」

ここから氷華視点☆

私達を迎えたのは私より少し上くらいの少年だった。
だが彼の出で立ちには少々人目を引く物がある。
まず、大きな羽。ズバットのものだろうか。
それに次いで頭に生えている二つのピンととがった耳、そして目に幾重にも巻かれた目隠しの布があまりにも私の中の常識から外れており、面食らってしまった。

「なんだ、人のことじろじろ見やがって。穴が空いてもおかしかねぇぞ」

「いえ…」

「この変な人は羽山影惟（はやまカゲノブ）。ポケモン部分はズバットで、何処に隠れても場所を感知されちゃうんだ」

「大抵暇してっからとりあえずなんかあったら頼れ。なんだかんだ言って助けてくれっから」

「お前ら、曲がりなりにも年上のヤツに対する態度がそれかよ…」

「影惟はアジトを広げることと、洞窟とか暗くて危なっかしいところの探索を任されてるんだ」

「ズバットの超音波・聴覚で探索が他の誰よりもより早いんだぜ」

「あぁっそ。じゃ、俺たち報告行ってくるからこの子を案内してあげといてね」

「なっ、おい！ちょっとまて、葉矢！剛毅！」

「そいつに何かしやがったらロリコン疑惑を偵察部隊全員にばらまくからなー」

「ざっけんじゃねえ！」

なんというか、有能なのに立場が低そうな人だ。

They are not my parents but who gave

サブ翻訳「彼等は私の親ではないけれど、産んで、ポケモンをくれた人たちなの」

They are not my parents but who gave

「おい、ポッチャマ」

「何」

「お前、親から名前はもらってるか？」

「親が私が生まれたら付ける予定だったと聞いた名前ならあるけれど、その名前は名乗ったことはない。今のところ使ってるのは名字ぐらい」

「もらってはいるんだろ？羨ましい限りだぜ、贅沢言うな」

「羽山は…」

「ま、人それぞれか。んじゃ、名乗りたい方の名前を教えてくれ」

「鋼屋氷華」

「れいとうビームでもくらいそうな名前だな」

「兄妹と一緒に考えた」

「お前とお前の手持ちは無教養でもないんだな」

「両親が残したのは本と字の読めるポッチャマだったから、二人で勉強して、家を出てリッシ湖の湖畔に移り住んだ」

「・・・お前は、親を恨んだことは無いか？」

「何で？」

「お前のことを、放棄したんだぞ」

目隠しのせいで羽山の表情ははっきりとは分からないが、彼が親に抱いている思いは軽いモノではないらしい。

「でもいろんなモノを残してくれた。それに、私は彼等を知らないから…彼等についてどうこう言える筋合いなんて無い」

「もらった名前は名乗らないのにか？」

「育ててくれた人は親だけど、そうじゃない人たちは私にとって親じゃない。だから知らない人たちからもらった名前は名乗れない…」

「お前は…」

「羽山は、何で親のことにこだわる？」

「…気にするな」

異端者（わたしたち）の身の上のことだろうから何となく分からないでもない。
きっと、人に話しづらい何かがあるのだろう。
それは異端者である限り剛毅だって葉矢だって同じようなことなのだろうと思う。
もっとも彼等は表に出さないが。

羽山に案内されて回ったこのアジトはとても広かった。
こんな規模のモノが私達の足下にあったのかと思うとある種の恐怖感のようなモノがわく。
幼くして親に棄てられた同胞達を拾い、彼等に十分な教養を与える教育施設まで在ったのだ。

The "Mechanic of steel", Mechanic

サブ翻訳:”鋼のメカニック”、レアコイル

The "Mechanic of steel", M

「ここは…元々誰が始めたの？」

「オレは会ったことはねぇがカントー地方の最強さんだとよ」

「カントー地方？南の方の？」

「ああ。だが、とんだ自由人らしくてよ、此処のトップは違う人がやってるぜ」

その人は、どんな思いで此処を作ってくれたのだろう。

此処までするということは、その必要があったとふんだからではないのだろうか。

「ほれ、着いたぜ。此処が研究室だ」

最後に連れてこられた部屋は所謂【現代科学で実現できうる限りの最新設備を搭載した】研究室だった。

というか俗世間を殆ど見たことがない私がその場所を形容できる言葉はその他にない。

見たこともないようなモノがたくさん並んでいて、私はただただ唖然とするのみであった。

「あら、影惟君。貴方また案内係を押しつけられたのね。その子は？見たところ水系ね」

何人もの電気タイプやエスパータイプと思われる研究員が自分たちのしていることに没頭する中、頭の回りに銀色の丸いポケモンが飛

び交っている眼鏡の女性が私達に気づいて話しかけてきた。
ねじの形をした耳飾りと鋼のような質感をもつ色をした髪の毛と瞳、そして大きな丸い眼鏡がとても印象的だ。
なんというか、硬質な色彩が一番際だっている。
彼女は唯一この研究室で機械に混じって鉄色をしていながらも決して此処の空気に埋もれては居なかった。

「コイツは今日葉矢達が保護してきたポッチャマだ。名前は…」

「は、初めまして。鋼屋氷華…です」

「敬語を使い慣れてないなら無理しなくても良いわよ、氷華ちゃん。私は西薗磁琉生子（さいおんじ ルイコ）、レアコイルなの。よろしく」

「てめっ、オレには敬語ぬきやがったな！」

「あら、大人気ない。生き物は野生に近ければ近いほど尊敬に値する人物っていうのを本質的に見極める力があるのよ」

「オレは値しないってのかよ！」

「いや…その…剛毅達が『ズバットの人にはあんまりへりくだらなくていい』って…」

「あいつら…」

「もう、そんなんだから後輩達にも下に見られちゃうんじゃないの」

彼女が羽山と話している間にも鉄色の丸いポケモンが私の周りで不規則に飛び回っている。

時折止まって手の部分と思われるU字型磁石をこちらに向けてくると、少し気分が悪くなって指先がぴりぴりする。

「このポケモンは…西薗磁…さんので…すか？」

「うーん、この子達は厳密に言うと違うのよね。私の分身みたいな？私と意識が少し繋がってるの。もしかして気分悪くなっちゃった？この子達、磁波をゆがめて飛んでるから電磁波に慣れてなかったり敏感な人はそうみたいなのよね…ごめんね？」

「いえ…」

「このヒト、優しそうだなんて思ってねぇか？氷華ァ…お前この女が実際に請け負っている部門がなんだか考えてみろぃ…一日中機械いじって修理したり作ったり改良したりしてんだよ。人呼んで【鋼のメカニック】様々だぜ。対人なんてまともになってるわけがねぇ。ほっとんど初めて見る種類の異端者（ヤツ）への好奇心だっつの」

「影惟君、余計なことを耳打ちするんじゃないの」

「ケッ、スルーしてくれぃ」

The "Mechanic of steel", M

ってなわけでルイちゃん登場です。
頭の周りでコイルが飛んでます。
設定→銀髪を肩胛骨の下あたりまでに伸ばしてハーフアップにしている。身長はやや高め。今時珍しいまんまる眼鏡。本部に引き取られるまでは電磁波を操って周りの機械を壊しまくる手の付けられない子だった。なぜか電磁砲が使える。

The "Foresight vision of disast

サブ翻訳『「未来の災いを視る者」アブソル』

The "Foresight vision of disast

「帰ったぜ、同胞を連れてな」

剛毅が報告をしに来た相手はその小さな部屋の真ん中に置かれた事務イスを陣取る一人の白と藍色の異端者。

「・・・おかえり、剛毅に葉矢。私の予想通りポッチャマだった？」

彼女は顔を上げることもなく淡泊に答える。

「はい！班長の読み通りでした。何故班長は種族まで分かるのですか？」

「かしこまらなくて良いよ、葉矢。只の勘さ。連れてきていないところを見ると今頃どこぞのズバットにでも案内させてるのかい？」

少し、口角を上げて若葉色の少年の質問をあしらう。その瞼は二人の少年が入室したときから閉じられたまま。

だが、その答えに朱の少年は低く言葉を返す。

「…その勘が何回続いてんスか」

「私がアブソルだからかな？なんとなくだよ」

だがその言葉にも、藍色の少女はその場しのぎのように目を閉じたまま、人差し指と親指でさいころを弄びながら答えた。

「アブソルって確か災いを予知するポケモンでしたよね」

「剛毅にしては鋭いね、何か引っかかることでもあったのかい？」
少女の口角が元の位置に落ち、閉じられていた目が開く。
さいころを弄ぶ人差し指と親指も制止する。

「・・・何でも無いッス」

朱の少年が、藍色の声ににじみ出る迫を感じ、引き下がった。
二人の少年が部屋を去り、中央の椅子に座る少女はまた一人になった。
彼等の足音が十分に離れるまで待つと、彼女はやっと一息付けるのだ。
「クスッ、何はともあれ良くやってくれたよ。未来の殺人鬼を野放しにするところだった…」
――――――――――――――――――――――――――――

「おい氷華、大丈夫か」

「…ごめん」
私はその後、ぼうっと影惟（カゲノブ）と琉生子（ルイコ）の会話を聞いているうちに倒れ

てしまったらしい。

「お前、機械とかの電磁波に敏感なんだな」

「うん…頭が、ぼうっとしてくる…」

「ずっと世俗から離れて生きてりゃ慣れねぇよな」

「…」

今居る場所は寝台が四つ並んでいて、私は一番ドアに近い方の寝台に寝かされている。
影惟が運んでくれたのだとか。

ーガラッー

葉矢と剛毅が入ってきた。
剛毅はけだるそうな表情で眉を少し上げながら口を開く。

「よぅ、ノブ」

「略すな！」

「お前…やっぱロリk」

「違う！断じて違う！」

「言い過ぎだよ、剛毅。大丈夫、俺は人の趣向を否定するつもりはないから」

「だから違うつってんだろ！誤解だ！」

「氷華、無事か？お前の貞ｓ」

ーばしっー

影惟のつばさでうつが私の横に来た剛毅にクリーンヒット。
さすがに剛毅もやり過ぎたと反省しているらしい。

The handled item.（前書き）

サブ翻訳『渡された物』

The handled item.

「紫音（シオン）、呼んで欲しい子がいるんだけど」

藍色の少女は、誰もいないはずの空間に呼びかける。

「それはアジェーアの少女？インディゴの言葉にウィステリアは答えます」

突如藍色の傍らに現れた藤色の少女は問う。

「察しが良いね。やっぱりあの子は紺碧（アジェーア）か、頼めるかい？」

「ウィステリアは確認します。それは北の原点、三色の異端の内、青の少女？」

「でなけりゃ呼び出しはしないよ」

「了解です。ウィステリアは実行します」

――――――――――――――――――――――――

――――――

和気藹々としていた仮眠室にて

「うぐっ…」

氷華が、突如呻いた。

「氷華?!」

彼女に駆け寄る剛毅を、葉矢が制する。

「剛毅、落ち着いて」

「なんだよ!おい、はなせッ」

“呼び出し”だよ」

頭を抱えてうずくまる氷華の額に開眼するように紫の宝玉が現れる。

「うっ…うぅあぁあぁぁぁぁぁぁッ!」

白目が黒く濁り、瞳はこもったように白く光る。

すると氷華は意識が断絶されたかのようにぴたりと叫ぶのをやめ、ゆっくりと立ち上がった。

「一颯(いぶき)さん…ですよね?」

「…厳密には精神のみであるとウィステリアはヴェルジュエに答え

ます」

「班長の差し金か…てめぇ、そんな強引に身体奪うこともねぇだろうが！」

「アジェーアの精神が痛みなしに乗っ取れるほど気迫で脆弱ではなかったためであるとウィステリアはヴェルミリオンに答えます」

今にも自分の班長の元へ乗り込まんとする剛毅を制しつつ、葉矢は氷華を見送った。

―――――――――――――――――――――――

急に眠りから覚めたように視界と意識を取り戻した私の目の前にいたのは初めて見る人。

薄暗い部屋なのに、相手の白い髪と上着だけでなく側頭部にはえる藍色のツノ（？）までもがはっきりと見える。

「初めましてだね、ポッチャマ。君の名前を教えてくれるかな？」

「だ…誰？」

「私は葉矢達が所属する班の班長、白川藍（しらかわアイ）」

一歩近づいてくるごとに白川の迫力は倍増した。

白と藍色でも構成された中に深紅の目が私の視線を釘付けにする。

「ぁ…」

「だから、名前を教えてよ。紺碧の原点さん」

「は、鋼屋氷華」

相手の言ったことの意味は理解しかねるが、ここで彼女の意図に反した行動を取れば殺される気がした。

「ふぅん…また随分と種族を意識した名前だね」

そうつぶやくと、白川は真っ白なズボンのポケットから桃色の薄い機械を取り出した。

「氷華、コレを君に。出会ったポケモンや異端者を記録していく機械、ポケモン図鑑さ。こいつを所持できるのは各地の“三色の原点”だけ。君こそが私が探し続けた北の最後の原点、青なんだよ」

「えっと・・・？」

「異端の図鑑所有者、北の最後の一角がみつかったよ…ソレはいずれ西の、南の原点達との絆にもなるだろう。だから決して手放さないでいて欲しい」

「…はい」

「良い返事がもらえて嬉しいよ」

ーーーーーシンオウ地方、異端の図鑑所有者がそろった。

The handled item.（後書き）

ヴェルジュエ＝草木などに用いる緑色の表現
ヴェルミリオン＝朱色
アジェーア＝紺碧、青色
ウィステリア＝藤色
インディゴ＝藍色

一颯紫音ちゃんに関しては、次らへんで…

My purpose of cooperation（前書き）

サブ翻訳→私が協力する理由

My purpose of cooperation

「ウィステリアは陳謝します。契約のため、図鑑譲渡のためとはいえ精神いえ、肉体を乗っ取ったことに対して。申し訳ありません」

白川の後ろから声がしたので急遽そちらに注意を向けると、黒目である位置が白く、白目が黒い藤色の異端者が居た。

とはいえこの部屋から出入りする物音はなかったのではじめからそこにいたらしい。

白川藍に圧倒されすぎてもう一人その場にいることにすら気がつかなかったのだ。

「貴方は…」

「一颯紫音（いぶき シオン）。自分はエーフィの異端者であるとウィステリアは名乗ります」

「そうだ、図鑑を渡すついでに初仕事を頼めるかい？」

「えぇっ・・・と？」

「葉矢達に言えば分かるから」

「は・・・はい」

「ウィステリアは手短に話します。ソノオタウンの花畑周辺の林に不審人物。人外を利用している模様。ウィステリアはアジェーアに伝言を要求します」

「ソレをそのまま葉矢達に伝えればいい？」

「付け足し。行動はなるべく人に対しては秘密裏に」

「わ、わかった」

「ウィステリアは同行する許可を要請します」

「・・・森の方で？」

白川が一颯を見る目つきが変わった。

『何を期待してんだ』とでも言っているようだ。

「…まぁいいや、私に見えるのは災いだけ。幸運なんて予測できないよ。勝手に行くといい」

「ウィステリアは…恐縮…です…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

「ふーん、ソノオねぇ…」

「ヘタしたら花粉症にでもなりそうな町だよな」

「えっと…どんなところなの？あと、仕事の内容って…」

「ん？簡単に言うと不審者とドンパチやって利用されている同胞を組織（こっち）に引きずり込む」

「剛毅、説明がそのまんますぎるよ…」

「間違ってはいねぇだろ」

「そーだけどさぁ！」

My purpose of cooperation（後書き）

次回からシンオウ原点組＋エーフィのチームが動きます。
不審者＝ギンガ団でおｋ

The "PSI controller of sun"

サブ翻訳↓『太陽の超能力者』エーフィ

このソノオタウンという町は悪く言えば剛毅が言ったとおり花粉症になりそうな町。

良く言えば、いや、ひねくれた見方をせずにいれば、美しい花畑の町だ。

「ウィステリアは要求します。一度に三人のテレポートはさすがに堪えたのでしばし休ませて欲しい、と」

「ケッ、率直にストレートに普通に言えっての。つかれたからやすませろーって」

剛毅が追い払うような仕草をすると、一颯はどこかへ去っていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー

そこは、思わず深呼吸をしたくなるほどの澄んだ空気で満たされている。

語彙が貧弱な私にはせいぜい木々のユートピアとしか言いようのない場所。

地名は、ハクタイのもり。

私がここに来た理由は一つ、それはあの藍色（インディゴ）との契約に関係すること。

私は彼女に兄妹達（イーブイ系）を自由に探すことを可能にする代わりに彼女に協力すると誓約をかわした。

なにせ兄妹達はばらばらに点在しているため私個人の力では思いあたる場所総てを回ることができないため、彼女の権力を盾に自由に捜索をさせてもらうしかなかった。

その代わりの丁稚奉公（でっちぼうこう）だ。

私が此処に着いてきた理由、それはこの森のどこかにイーブイの進化ポイントがあったから。

そこで進化するイーブイは確か…

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「またお前らか、このピチピチタイツ宇宙人」

「懲りないね、ポケモンバトルでなら勝てると思った？」

「「甘いよ／甘ぇよ」」

「所詮人外のガキどもが！お前らの戦闘能力はともかく、ポケモンバトルなんかする脳がどこにあるってんだ！」

双方、ポケモンを繰り出す。

ピチピチタイツの変質者側からはニャルマー、スカンプー。

剛毅&葉矢ペアからはビッパとウソハチ。
「ケッ助かったぜ。いくら俺でも連中とバトるのはゴメンだからな」
だがそのまま他人のものと思われるポケモンを抱えて逃走するピチピチタイツの変質者が一名…
「どこに行くつもり」
彼の腕を、冷たく白い少女の手がつかみ上げる。
「他人の家族を奪ってまで何がしたいの」
「っは…はなせっ」
「聞いてる？」
見れば、少女に捕まれた部分がどんどん凍っていく。
「うわぁあぁぁっ、このっ、バケモノがッ！！」
その台詞を聞いたとたん、何かのスイッチが入ったのか、氷華の瞳から情の色が消えた。
「何だ…お前、黙りやがってぇぇぇぇぇ？！」
氷華は、躊躇無く凍った男の腕をばきりと肩口から独立宣言をさせる。
凍った腕は、男の痛覚を奪ったままカッターナイフの刃でも折るよ

うにあっけなく外れた。

The "PSI controller of sun&quot

主人公ちゃん…世俗離れしてる所為で躊躇ねぇ…
道徳的な考えという基盤が染みついてないんだ…
怖い、怖い

What do you need to understand about

サブ翻訳→君がちゃんとわかっていなければいけないこと

What do you need to understand about

「跳べッ！デッパ」

「ウソハー、げんしのちから」

ウソハチが地面を強く蹴り、相手のスカンプーの足下からその震動で石や土が跳ね上がる。

「クッ…一瞬で戦闘不能かよ」

「まだ俺のニャルマーがいるぜ！みだれひっかき！」

相手の攻撃に対し、葉矢は呆れ顔。

「ウソハチを何タイプだと思ってるわけ？」

「デッパ、ひっさつまえば！」

落ちてくる勢いに載せてビッパがひっさつまえばをニャルマーの背に当てる。

無論、一撃で戦闘不能だ。

「オラ、とっとと略奪したモノおいてけよ」

「戦っても勝てないことぐらい分かっててやってる？」

二人の少年は、余裕の表情でピチピチタイツの変質者、もといギンガ団の下っ端に退却を促す。

「さーてと、氷華ー！待たせちまったか…って…お前！」
剛毅の目に映ったのは、大量のモンスターボールの入ったかごと…
凍った人間の腕を片手に持った水色の少女。
「…」
剛毅は何も言わず、彼女の頬を張った。
彼の悲しそうな、怒っているような、泣きそうな視線に気づき、氷華は持っていたモノを取り落とす。
「ぁ…わたし…なにを…」
ギンガ団の下っ端はもう逃走済で、彼女が持っているのは腕だけ。
だがそれは、剛毅にとって直視し辛いものだった。
「剛毅、後でこのポケモン達を持ち主の人たちに返そうねって…氷華？」
先ほどまで人の腕をつかんでいた右手を左手で握り、がちがちと歯を鳴らして震える氷華。
「（わたし…初めて人を…壊した…？）」
葉矢は、何も言えずに後ろを向く剛毅を押しやり、氷華の手を両手

で包んだ。

「ちゃんとわかったね？初めて人を壊した感覚。自覚したら怖かった？自分の力がどういうモノか分かったよね？こんなに震えて、自分でも怖かったでしょ？」

葉矢は氷華を落ち着かせると、先ほどとは打って変わった強い口調で氷華をたしなめる。

「でも、それはいけないことなんだよ」

「うん…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「何、人外に負けたって？」

「ハ、ハイ…奴ら、ポケモンのレベルを上げておりましt」

「あたしは言い訳を聞いてやるためにいるんじゃないよ」

赤毛の女が厳しい一言を放つ。

「アンタはどうしたんだい。左腕の肘から先は何処にやった」

「水系の人外に…凍らされて…」

「水系…ねぇ…」

女は冷たい笑みを浮かべる。
それは先ほどまでの部下への嘲笑とはまた違ったもの。

「相性抜群じゃないか…」

What do you need to understand about

作者が一番好きなギンガ団幹部はマーズだったりする。
可愛いじゃん、あの子。

Heading to a battle（前書き）

サブ翻訳→『戦いに向けて』

今回のスタートは紫音ちゃんです

Heading to a battle

森の中を暫く歩き続けると、大きな苔生した岩が見えた。

岩の上にテレポートしてみると、案の定岩に寄りかかって寝ている二人の異端者がいる。

まだ幼い姉弟のようだ。

一人はふわふわしたマフラーを巻き、頭から大きな茶色の耳がはえている。

マフラーと同じ色の尻尾から、まだ進化前のイーブイのようだ。

もう一人は植物の葉のような耳を生やし、となりで寝ているイーブイに身体を預けさせている。

弟と思われるイーブイの手元にあるかじりかけのオレンの実から、この二人がこの森で細々と生活していたことが分かる。

「起きるまで…ウィステリアは見守ることにします…」

岩の反対側に降りて、そろそろ来るであろうと予知したG団の下っ端を迎え撃つ準備をしよう。

＜ガサッ＞

「ウィステリアは以外と好戦的なのです」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「氷華、戦う準備はできてる？」

「ぇ・・・？」

「連中が走っていった方向、プロペラが立っているところを見るにおそらく風力発電所。今回の奴らの拠点らしい」

「・・・うん、大丈夫」

「氷華、お前は異端者同士が戦う際のルールを知ってるか？」

「えっと…ダブルバトルだっけ？」

剛毅の表情は安堵の色を見せる。

「そうだ。ノブから聞いたのか？」

「うん・・・」

異端者同士のバトルのルールは至極単純。

異端者が自分のポケモンと共闘するのだ。

つまり異端者の一対一のバトルならば一人と一匹VS一人と一匹と

いう風になる。

ポケモンをサポートに使ったり、自らがポケモンをサポートしたり、それぞれソロで戦ったりと人によって様々な戦い方があるというわけだ。

「じゃ、行くか」

「うん」

「俺も久々に暴れようかな」

Let's face the beginning（前書き）

サブ翻訳→「さて、始めようか」

Let's face the beginning

「おい、お前らも探せ！確かこの森にも人外が居たはずだ！」

この清らかな聖地を荒らすG団達に嫌悪感を感じない人がいるだろうか。

ポケモンを取られるのではないだろうかと逃げ隠れしているトレーナーや、怯えて出てこないポケモン達にかわって私が粛正することにしよう。

「貴方たちは、一体誰を捜しておられるのでしょうか」

「！！！」

私のかけた声に気づいたG団の一員は、当然のことのようにモンスターボールを構える。

「只声をかけただけの通行人に対して随分と警戒しますね、とウィステリアは冷笑します」

「黙れ人外がッ！」

その一言を皮切りに、相手も私もモンスターボールを投げた。

相手が繰り出したグレッグルを私のロズレイドが右手から出たつるのムチで締め上げる。

グレッグルがぐったりしたところで地面に落とし、このバトルに気

づいた他のＧ団員達に向き直る。

「全員まとめてかかってきてもよろしいですよとウィステリアは挑発します」

ーー

「此処が…たにまのはつでんしょ…」

「みたいだけど…なんだか風が強すぎねぇか？」

「そうだね、多分コレは“僕たちと同じ子”を使ってるんだろう」

「そうとわかりゃあ突撃すっか！」

「だね。いたずらに杞憂を募らせて作戦を考えて頭を痛めるよりもその場その場の判断で行った方が早いよね」

「…葉矢」

「何？氷華」

「葉矢は、あのプロペラをスゴイ勢いで回してる元手を止めてきて。突撃は、私と剛毅だけでいい」

「…良いけど、何で？」

「寒気がする。三人で行っても削られる戦力が増えるだけ。だからこの中で一番強い葉矢に確実に相手の目的を阻止できると思われる行動を取って欲しい」

空気が、ずしりと重くなる。

これが仕事の現場なのだと三人は改めて実感するとともに、自分たちの力量に不安を持ち始めた時。

剛毅は顔を上げ、眉をひそめる氷華の頭を手の平でぽんぽんと叩いた。

「な、何ｓ」

「葉矢の言うように杞憂募らせたって仕方ねぇだろ？とはいえお前の作戦は実行させてもらおう。だからな、葉矢。お前は安心して行ってこい。俺らなら多分、大丈夫だ」

「・・・うん！」

剛毅と氷華は発電所の正面へ、葉矢はプロペラが立ち並ぶ裏手へと歩いていった。

I' m not that weak though・・・（前書き）

サブ翻訳→『わたしはそんなに弱くないわ…』

I' m not that weak though・・・

「よぅ、お二人さん」

「幹部が警戒するからとんでもない奴かと思ったのに・・・ザコ臭っ」

発電所前で私たちの目の前に現れたのは電気系の異端者二人。

一人は長くて黄色い耳の生えた少年で、もう一人は小柄な少女。

少女の方には青くて小さな耳が肩より少し下くらいの白い髪の毛の間からちょこんと生えており、それだけならば異端者とは判断がつかないが、頭より少し高い位置まできている大きな尻尾がそうであると外見から教えてくれる。

「貴方、水系でしょ？」

「・・・っ、そうだけど！」

「ホラ、楽勝だって！ね？鋼太！」

「ったりめーじゃん」

図鑑をこっそり開いてみると、彼等はそれぞれパチリスとピカチュウの異端者であると分かった。

ピカチュウの少年は、かなりレベルが高いらしい・・・

「剛毅・・・」

「んな不安そうなツラしてオレを見上げるなっつの。たとえ苦戦したってよ、勝ちゃいいんだ」

剛毅だって不安じゃないはずがない。

私にそれを言うことによって自分を勇気づけようとしたのだろう。

なら、わたしだって全力でこたえるほかないだろう。

「どうでもいい。はじめよう」

「おぅよ！」

私とこのピカチュウの少年の言葉で、一気に空気が戦場のソレになる。

「クルミ！出ておいで！」

「出ろ！ピカたろう！」

「たよりにしてっぜ、デッパ！」

「たのむよ、いぜる！」

先ず先手を取ったのは相手のパチリス。
仕掛けてきたいかりのまえばに剛毅のデッパがひっさつまえばでかえす。
次に、スパークで私に突っ込んできたピカチュウをいぜるがスピードスターで足止めし、水流をのせた尻尾を回転させながら当てて戦闘不能にした。

「フゥ、やるじゃねぇか」

「鋼太、相手をバカにしすぎ」

「んじゃ、オレはあの青い嬢ちゃんとサシでいっかぁ！」

「・・・来い」

いきなりかみなりパンチを構えて突っ込んできたピカチュウの少年を私は手に氷の刃を纏わせてガードする。
すかさずまわしげりの追撃が来て私の体は上に飛ばされるが、私その隙にいぜるがかみなりパンチを構える相手の足下にれいとうビームを放った。

「おうわぁっと・・・流石にナメすぎたぜ・・・」

「はやく氷を砕けば？」

足元を固められて動けないピカチュウの少年に着地点から急接近し、膝で鳩尾（みぞおち）を蹴り上げる。

「がっ…」

彼が吐血した返り血が服につかないように肘で受ける。

「バカにしないで」

I' m not that weak though・・・（後書き）

バトル引き…

Let's just do it... You know, serio

サブ翻訳↓「とっととやろうぜ…ホラ、ガチで」

Let's just do it. . . You know, serio

「なんだ…やるじゃねーか」

「手を抜いてるのはわかってる。心にもないこと言わないで」

「心にもない事って…謙遜しなさんなよぅ、お嬢さん」

不敵な表情を顔面に貼りつけたままピカチュウの少年は私を見る。遠距離攻撃でもしてくるのかとおもいきや、拳に帯電させていた電気を足元にうつして氷を爆散させた。

「俺は鋼太（コウタ）。雷鋼太（いかずちコウタ）だ！俺はガチでバトルができるとふんだ奴にしか名乗らねぇ。出来ればお前の名前も教えろよ」

「いいよ。私は氷華。鋼屋氷華！どういう理由であなたが連中に協力してるのかは知らないけれど、行く手を阻んでくる限り私は戦う」

「久々に全力で暴れられっぜ…シビレさせてやんよ！」

「上等！」

冷気の拳と、雷の拳がぶつかり合う。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー

「自分と相手の力量の差がわかったならとっとと退却してくださいなとウィステリアは促します」

「くそっ…覚えてろよ人外め！」

G団達が退却していったのを見届けると、すぐにあの姉弟がいるべき岩陰に行ってみた。
だがそこにはかじりかけのオレンの実がひとつ、転がっていただけだった。

「まさかっ…」

もう…連れ去られてしまっていた…？
だが、私が抱いた不安は杞憂で終わった。

がさっ

物音に振り向くと、そこにはあの姉弟。
弟の方は不安そうに姉の服の袖を掴みながら後ろに隠れている。

「っま、守ってくれて…ありがとう…」

「そう警戒しないでくださいな。只の、ウィステリアの好意です」

「・・・」

ーーー

「だが容赦はしねぇよ」

鋼太のアイアンテール、もとい蹴りが氷華のこめかみを容赦無くえぐる。

Let's just do it... You know, serious

バトル大好きー！

Evolution（前書き）

サブ翻訳→「進化」

Evolution

「うぅっ…あッ…」

頭をやられた。

視界が霞む、音が聞こえない。

痛い。痛い痛い痛い

「だな」

「なっ…やめ…ろ…」

二人はそれぞれ満身創痍の少年にアイアンテールを構える。
鋼太は右足を、パチリスの少女は大きな尻尾を。

嘘だ、やめて。
お願い！
剛毅はもうボロボロじゃない！
でも鋼太はやる。
確実にアイアンテールを剛毅にぶち当てる！
ーー私に選択肢なんて残ってるはずがない。

「「アイアンテールっ！」」

二人の攻撃が当たるべき的の前に何かが立ちふさがる。
それは氷の刃。氷華の腕。
「そんなんで受け止められるとおもうなよっ！」
勿論、このままの状況であれば、雷鋼太は至極当然のことを言ったまでだ。

だが、ニャルマーの目のごとく、雪山の天気のごとく戦局は変わるものである。

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

氷華の全身から内に溜めておくことが不可能になったエネルギーが外にまで溢れ出し、光となって視覚化される。

氷華のポケモン部分が、さながら突然変異のように別のものに作り変えられてゆく。

この現象の俗称を、人は進化とつけた。

腕につく氷の刃が鋼に替わり、着ていたミニスカートのワンピースが形状を変える。

異端者の力の象徴は衣服にも現れる。

例えば色。

水系であれば青、炎であれば赤系などと衣服の色でのタイプ判別が可能。

たとえば形。

岩や鋼系ならば鎧のような硬度と形状を見せてくれるであろう。

氷華の衣服は水色のワンピースから深い群青がベースとなった燕尾服へと変化する。

群青のネクタイ、シアンのYシャツ、そして水色の氷刃（ブレード）は紺碧の鋼の手甲（ガントレット）に。

透き通るような水色だった短髪は深い群青の長髪に。
その真ん中に額からV字に伸びる黄色い頭飾りが反対色のコントラストによって鮮烈に映る。
鋼の手甲は生半可な物理攻撃(アイアンテール)など容易く防いでしまえる。

氷、水に加えて鋼を操る事ができる原点。
氷華はもうポッチャマの異端者などではないのだ。

「メタルクローッ！」

彼女の手甲(ガントレット)の両脇が肘側に伸びて刃と化して振るわれ、その威力を知らしめる。

「私のポケモン部分はポッタイシ！氷、水、鋼を操使(そうし)する者！」

Reset and start it.（前書き）

サブ翻訳→「リセットして始めよう」

Reset and start it.

「うぉっと…こいつは何の冗談だ…？」

「なんでもかんでも一つしか回答なんてないでしょっ…どうやらこの子の力に理屈なんて通じないらしいってことぐらいしかわかんない…」

氷華は何も言わず、両腕でメタルクローの構えを取った。
手の甲を覆うほどのサイズだった手甲は、V字に再び変形する。
縁はすべてブレードが向き、長さは肘まで達していた。

相手の二人がそれぞれの利き手に電流を帯電させたのを確認すると、氷華は先ほどとは打って変わって穏やかな表情で後ろにいる満身創痍の少年に振り返る。

「少し、休んでて」

それこそ、彼が今まで見た中で一番優しい笑顔で。

前に向き直った氷華の目元は完全に相手にフォーカスしていた。

「ちゃま、いくよ」

私はポッチャマをボールから出し、鋼太と向き合う。
パチリスの少女は戦闘不能になった自分のパチリスをボールに戻していた。

２ｖｓ２のバトルが、リスタートする。

「うおぉおおぉぉぉぉっ！」

正面から来た鋼太のかみなりパンチを左足を引いて躱し、前につんのめる背中に肘を入れる。
すかさず右からくるパチリス少女のスパークを跳んで避け、上かられいとうパンチを尾に当てた。

「ぐっ…」

「ううっ…」

自分の体よりも体積が大きいと思われる尾を凍らされ、仰向けに倒れたパチリス少女の横に立った。

「さっきまでの自信はどうしたの？」

「あんたって…嫌なやつ…ね…」

「…少し寝てて」

彼女の腹にかかと落としを入れようとしたその時。

「うわぁっ！」

私に向かって１０まんボルトが放たれた。

「木崎に…手をっ…出すな…」

それは口の端から血を流しながら立ち上がった鋼太のものだった。

「そういうわけにはいかな…いぃっ！」

私の足首を掴み、パチリス少女が直接電流を流しこんできた。

立て続けに電気技を食らった私は為す術もなく倒れてしまう。

「無理をしないでよ、ピカ」

「うるせぇ。お前な…まともにあんなん食らったらそれこそ本当に…」

「御託はいいの…今のわたしに…余計な電気使わせない…で…よね…尻尾が…凍って…微蓄電量が…使えないんだから…」

「なら休んでろ。ここは、俺がカタつけてやる…」

「…了解」

寝転がって少しは回復したのか、とりあえず立ち上がることができた。

「物理技だけかと思ったら、特殊攻撃だってかなり痛いじゃん…」

先ほどの鋼太とのバトルで受けた攻撃で、私は十分ぼろぼろだ。

だが鋼太だってかなりのダメージを受けているはず。

ーーこのバトル、どちらに転んでもおかしくはない。

「おまえが言うなよ。水タイプなら特殊技でも撃ってこいや」

「むざむざ電流を体内にまで受けてたまるもんか」

「だよなぁ！」

再び、アイアンテールとメタルクローがぶつかり合う。

Reset and start it.（後書き）

ピカの容姿説明→金髪ピカ耳。黒目で長身、かみなりのいしのペンダント。背中にピカチュウと同じ茶色のラインが入った黄色いタンクトップ。灰色の長ズボン。

パチの容姿説明→白髪パチ耳。前髪の真ん中のところだけ青髪。黒目で小柄。白いノースリーヴのワンピース。でっかい尻尾が生えてる。メガネっ娘

A conclusion and a・・・（前書き）

サブ翻訳→『決着と…』

今回の構成：氷華＆剛毅ｖｓピカパチ→視点変更、時間を戻して葉矢へ

A conclusion and a...

そこから私と鋼太の攻防は書き記す意味もないほどに極めて単調。
いうなれば互角だった。
変わったことといえばちゃまが戦闘不能になったことぐらい。
両者とも体力の限界が訪れはじめ、今は俗にいう膠着状態だ。
鋼太の手が私の喉を掴み、私のメタルクローは鋼太の首筋にピタリと当てられている。

「決着、ついてんのかな」

「え…？」

「かっさばくのと電流流すのとじゃ、わけが違うぜ？」

「貴方だって、一度に一瞬で私を昏倒させられるくらいの電流を流す力は残ってないはずだよ」

「試してみるか」

「そうだね、私もこれを横に引くかあなたのその手を凍らせるか、直感で選ぶことにする」

「「せーのっ」」

二人がそれぞれの手に力を込めた瞬間、地面が揺れた。
驚いて互いの手を離したあとの反射の速さが明暗を分ける。

ー氷華が、その場を制した。

地震の発信源は剛毅。
彼が渾身の一撃を地面に打ち、揺らしたのだ。
彼は味方である氷華を巻き込まないために、熱を彼女の足元に送り、いち早く回避させた。

「うあぁぁぁあぁぁぁっ！」

跳びそこねた鋼太はこうかばつぐんのじしんをもろに受けてしまい、その場に倒れ伏す。

「っくしょぉ…外野が手出しするなんて…反則だぜ？」

ーーー

「いまちょっと忙しいんだ。少し、待っててくれるかな？」

えへへ。なんて付け足して再びこちらから視線をそらすところを見ると、俺はやっと確信を持った。

物心付く前からそこにいた場合、何をやらされても本人にとっては善悪の概念などない。

“親”という名の絶対の意思に従った行動は、彼らにとっては行なって当然のこと。

ーーーーこの子、自分が何をしているかなんてほとんど分かっちゃいないんだ。

I' ve found a reason for me to go.（前書

サブ翻訳→『俺は行かなければならない理由を見つけた』

今回の構成：葉矢視点→決着がついたあとの四人

I' ve found a reason for me to go.

「君は…ここで何をしてるのかな？」

「んー？ちょっと離れたところに雨を降らしてるんだー」

雨…？風車を回すのは風。
単に空気を冷やして風をこちらに吹かせているのとはわけが違うほどの暴風だし、第一に此処ソノオタウンはそんなに熱くもないから温度差自体がほとんど生じていないはずだ。
いくら彼とてにほんばれとあまごいを同時に行えるはずがない。

「ど、どうしてそんなことしてるんだい？」

「んとねーたしかマーズさんは侵入者を排除するのと、所長を見はるので発電所を離れられないからその場でこっちに向けてドーミラーのすなあらしを使ってるんだって。そんで僕があのへんに雨を振らせればすなあらしの砂が地面に落ちて此処には風だけが吹いてるんだー」

なるほど。
今此処でやっていることを気取られないためにも発電所よりも少し手前のほうで雨を降らせているというわけか。
此処で彼が風を吹かせているように錯覚させるため…

…なんだ、最終的には人外の彼に全てをなすりつけてトンズラするつもりだったのか。

「き、君。名前は、なんていうの？」
「僕？僕はルゥ。峰波（みねは）ルゥっていうんだ」
「俺は葉矢。戊葉矢、よろしくね、ルゥくん」
「う…ん…」
彼の答えを待つまでもなく、俺は眠り粉をまとわせた枝を彼の背中に突き刺した。
「ちょっと、寝ててくれるかな」
罪の意識がない子供を容赦無く締め上げるだなんて俺にはできない。とりあえず、元手を絶つことにした。
彼が降らせていた雨がやんだのか、風と一緒に砂が吹き込んでくる。それこそ、僕の頬に赤い直線をひきながら。
「らぁぁぁあぁあぁぁっ！」
地面に拳を叩きつけて波長（パルス）を送る。
するとその場に生えていた植物が爆発的に成長を始め、大きな平たい生垣のようなものを築く。
これで飛んできた砂がプロペラに詰まって壊れるなんてことは防げそうだ。
こんないたいけな子供まで使ってG団は何がしたいんだ。
多分、今回の事件もまた末端によるものだろう。
絶対に…元締めを掴んでやる…

ーーー

「一颯！」

藤色の耳と髪の毛をなびかせながら登場したのはエーフィの異端者、一颯紫音（いぶきシオン）。

両脇に二人の幼い異端者を抱き抱えていた。

「ウィステリアが今すべきことは…ポケモンセンターから救急箱でもアポートすることでしょうか」

「あぁ、頼む」

「了解でありますとウィステリアは快諾します」

It could be an unexpected incident,

サブ翻訳→「これは想定外の事態かもしれないけどさ、でも俺はそっちが普通だと思うんだ」

これ＝葉矢がキレること

It could be an unexpected incident,

此処にテレポートしてきた紫音がしてくれたのは至極単純なこと。
エスパータイプの彼女はアポートといって、遠くにあるものを自分のところに瞬間移動させる事が可能。
なので応急措置に最低限役立ちそうなものをポケモンセンターからアポートしたのだ。
彼女の行った応急処置は的確で、火傷とアザだらけの私には絆創膏数枚と塗り薬で済んだが、骨折・打撲・裂傷・火傷がてんこ盛りの剛毅は包帯だらけになった。
ちなみに鋼太は切り傷と凍傷がほとんどで、切れ味が鋭かったから傷口も癒着しやすく、温熱サポーターをつけておけば大丈夫らしい。
それでもパチリス少女、鋼太、剛毅はげんきのかけらを飲むことにはなったのだけれど。

「ア、アジェーア…このパチリスは…」

「そうだね。剛毅」

「わかってらぁ。どけ、一颯」

片足を引きずりながらパチリス少女に歩み寄った剛毅。
彼はそのままほのおのパンチを構え、パチリス少女は覚悟を決めた様は顔をする。

「なっ…てめぇ！胡桃（クルミ）に手をd」

剛毅のほのおのパンチは凍ったパチリス少女の尾部にあてられ、彼女の氷は溶けた。

「お前、あんましダメージ食らってなかったんだからこれで歩けんだろ」

「あ…ありがとう」

鋼太とパチリス少女は唖然とした表情で剛毅を見ていた。

ーーー

「ハッ、言ってくれるじゃん！」

両者のボールが投げられた。

The battle style I own.（前書き）

サブ翻訳→「俺が持つバトルスタイル」

The battle style I own.

「ブニャット、だましうちっ！」

「命中したその瞬間を狙って！コロリー、がまんを解け！」

「うにゃあぁぁお！」

マーズという名の赤毛の女と葉矢はバトルまっただ中であった。
葉矢のチームはナエトル、ウソハチ、コロボーシといった一見心もとないメンバーではあるが、実質彼のウソハチはマーズのドーミラーとズバットを倒し、コロボーシは彼女の切り札らしきブニャットと互角に戦っていた。
確かにレベルは葉矢のポケモンのほうが低い。
だが、彼はそうやって今まで自分よりレベルの高い相手と戦い、勝利してきたのだ。
バトルを制するのはレベルではなく、戦略なのだと彼は対峙した相手に実力で語るのだ。

「コロリー、相手は確実に君より早い。弱っているとはいっても油断しちゃいけないよ」

「コローォン」

「物理攻撃に固執しなくてもいいのさ。わかるよね？」

コロボーシは彼の表情を確認し、力強く頷いた。

「むしのさざめき…ぇ？コロリー？」

だがコロボーシがむしのさざめきを放つ瞬間、ブニャットのでんこうせっかがクリティカルヒットしていた。

バトルを制するのはレベルではなく戦略なのだというが、やはり威力ではレベルがモノを言う。
ましてや相手はブニャット。

ーーーーコロボーシは、倒れた。

「あたしのポケモンに何するのさッ！」

「なっ…」

「回復アイテムを戦闘中に使っちゃいけないだなんてルールはないんだからねッ！」

「くっ…ナーエ！」

「あらぁ？そんな可愛いわかばポケモンなんて戦力になるの」

ナエトルの方も不安そうに葉矢を見上げる。
だが葉矢は口角を釣り上げて不敵な表情を作った。

「ざんねんながら、俺の切り札はこのナーエなんだよ！」

「ハッタリ！ハッタリに決まってる！ブ、ブニャット…みだれひっかき！」

マーズの表情に不安の色が浮かぶ。
この少年の実力は先ほど見たとおりだ、だが自分のブニャットは優勢なのだ。
否、だからこそ不安。
冷静で的確な指示を出して勝ってきたであろうこの少年がハッタリなどかますはずがない。

ーーーという錯覚が彼女を支配してしまったのだ。

マーズにあえて不安をもたせ、強い技を連続で出させることが葉矢の狙い。
攻撃スタイルが物理タイプのブニャットは技を出すのに相手に接近しなければならない。

彼がナエトルに出した指示はひとつ。

「ひたすらやどりぎのタネを相手に植えつけろ」

「見ててください。ここからが僕の逆転劇ですッ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1941v/

ポケットモンスター　～とある人外達の奮闘記～

2012年1月9日23時52分発行